

伝えたいこと

副読本
1 ページ

年 組 番 氏名

1

震災を経験した作者が伝えなかったことは何か、また、自分のこれからの生活をどのように送っていくことが大切かを考えてみましょう。

伝えたいこと

3月11日、私は翌日に卒業式を迎えるはずの中学生でした。見ていた卒業アルバムや筆入れやペンが落ちると同時に、私の目から涙が溢れ出し、目の前がぼやけたことを今でも覚えています。震災の時、涙を流したのはこの時と父と母に再会した時だけでした。その他は、なぜか分からないけれど一度も泣きませんでした。周りには泣いている友人達、目の前には悲しい出来事。それなのに私は泣きませんでした。苦しかったです。

そのような思いを誰に言えるでもなく時間だけが過ぎていきました。

ご飯もお風呂もトイレも寝ることさえ普通にはいかなかったあの頃。学校は慣れない土地に通い、部活も十分にできない環境。今思い出して一番強く思うことは、「当たり前なことなんて一つもなかったんだ。」ということです。今まで私たちのほとんどが口にしたことがあり、頭の中にある言葉ではないでしょうか。

震災を経験した私は、「何よりも当たり前は存在しない。」と思ったことを伝えたいです。人によっては考えが違い、これを否定する人もいるかもしれませんが、私はこの思いを伝えていきたいです。今までの生活を振り返って見ると一つ一つのことを頭の中のどこかで「当たり前のこと」と思っていました。

震災後のある授業で私たちのクラスは震災について話し合いをしました。メリット、デメリット、どう直していくか、どんな町にしたいかなど。その意見の中で、みんなが一緒だった思いが、「『当たり前』とは思ってはいけないこと」ということでした。

毎日顔を合せている家族や友達に何かを伝える。それは、人間だから当たり前と思っていました。しかし、考えて見ると当たり前も何も、その人達が存在しないとできないものばかりです。ですから、私は伝えたいのです。周りの存在を、自分の存在を、今をかみしめてほしいのです。

今、私の机の上には1枚の写真があります。それは、3月11日、あの日地震がくる前に数人で笑いながら囲んでいた1つの写真です。裏には、クラスの人数と日付が書かれています。私はこの写真をタイムカプセルに入れる予定でした。しかし、地震がきて机から落ち、踏まれてヨレヨレになってしまい、今は、私の手元にあります。

高校に入ってから、中学校の先生がまとめてくれた荷物の中から見つけました。いつかまた、クラスみんなに会うとき、その写真を見て皆さんのことを話したいです。みんなの存在をかみしめながら。

(2013年3月31日 南三陸町教育委員会発行『震災作文集 希望に向かって』より)

